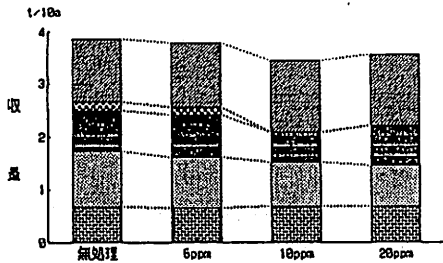
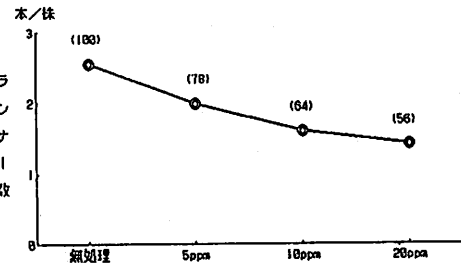


課題名	53 わい化剤利用によるイチゴの省力育苗技術の確立	分類	②
	イチゴわい化剤 S-327D乳剤利用による健苗育成		
試験研究年次	62~1年(完了)		
I 目的 イチゴのランナー発生抑制による省力的な育苗技術、及び低温暗黒処理による夏期低温処理栽培での徒長防止技術を確立するために、わい化剤 S-327D乳剤の適切な使用方法を明らかにする。			
II 試験方法			
1 供試薬剤名 S-327D乳剤(ウニコナゾール-P 5%)			
2 供試品種 とよのか			
3 試験区の構成			
試験-1) 育苗期処理試験			
処理濃度 5, 10, 20ppm			
試験-2) 低温暗黒処理による夏期低温処理栽培での実用化試験			
処理濃度 5, 10, 20ppm			
4 わい化剤の処理時期及び処理方法			
	処理時期	処理方法	
試験-1)	62年7月16日	茎葉噴霧処理	1株当たり 10cc
試験-2)	63年8月20日	茎葉噴霧処理	1株当たり 10cc
	1年8月25日	茎葉噴霧処理	1株当たり 10cc
		心部点滴処理	1株当たり 0.03~0.04cc
5 試験規模 1区20~30株			
6 耕種概要 育苗方法: ポット育苗(12cmポリポット)、			
育苗用土 真砂土: 粒状培土: もみがらくん炭 = 6:3:2 (容量比)			
夏期低温処理時期: 63年; 8月20日~9月9日, 1年; 8月25日~9月11日			
定植時期: 62年; 9月16日, 63年; 9月9日, 1年; 9月11日			
III 主要成果の概要			
1 供試薬剤はいずれの濃度においても薬害の発生は認められない。			
2 育苗期処理のS-327D乳剤5ppm溶液の茎葉噴霧処理は、収量への悪影響は認められず、無処理に比べてランナー発生及び茎葉の伸長を抑制するので、育苗管理の省力化に有効な方法である。			
3 苗の低温暗黒処理による夏期低温処理栽培において、S-327D乳剤5~10ppm溶液の茎葉噴霧処理及び同5ppm溶液の心部点滴処理は、低温処理期間中の地上部の徒長抑制効果が高く、収量への悪影響も認められず、実用性が高い。			
4 夏期低温処理栽培では定植後2カ月ほどわい化効果が持続するので、生育初期の徒長を防止出来る。			

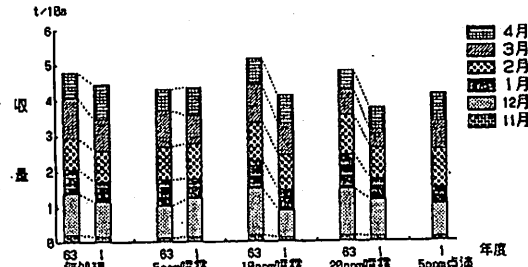
IV 主要成果の具体的数字



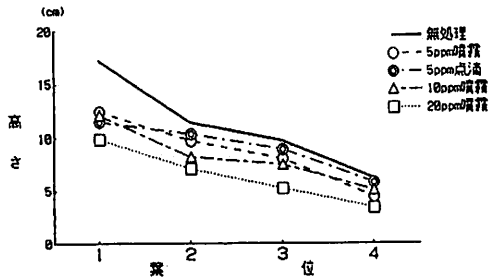
第1図 育苗期処理と収量(62年)



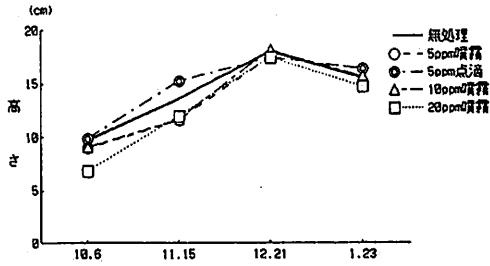
第2図 育苗期処理とランナー発生数(62年)



第3図 夏期低温処理栽培における収量(63,1年)



第4図 夏期低温処理栽培での葉位毎の葉柄長(1年)注)処理時の葉位=1



第5図 夏期低温処理栽培における草高の推移(1年)

V 成果の評価と取扱上の留意点

- 1 実際の利用に当たっては、イチゴに対する植物生育調節剤としての登録が必要となる。
- 2 土壌に灌注した場合には極端なわい化効果が現れ、生育が著しく阻害されるとともに残効も著しく長いので、噴霧処理においても薬液が垂れない程度の薬量にとどめる。

VI 今後の研究上の問題点

- 1 わい化作用を迅速に解消する技術の確立
- 2 わい化剤の利用を前提とした夏期低温処理栽培技術の確立

VII 資料名

62~1年度 福岡県農業総合試験場園芸研究所 野菜試験成績書